高校部活動における問題行動の規定要因に関する分析の試み

―指導者の暴力，部員同士の暴力・いじめに着目して―

長 谷 川　祐　介

A Trial Analysis of Determinant Factors of Problem Behavior in High School Club Activities

－Focusing on Coaches' Violence, Club Members' Violence and Bullying－

HASEGAWA, Yusuke

大分大学教育福祉科学部研究紀要　第 35 巻第 2 号
2013 年 10 月　別刷
Reprinted From
THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF
EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,
OITA UNIVERSITY
Vol. 35, No. 2，October 2013
OITA, JAPAN

高校部活動における問題行動の規定要因に関する分析の試み

―指導者の暴力，部員同士の暴力・いじめに着目して―

長 谷 川　祐　介*

【要　旨】　本稿は,「部活動における問題行動の発生と収束のメカニズム」を明らかにするひとつの試みとして, 2003 年に実施した大学生対象の高校部活動に関する回顧調査（質問紙調査）のデータを用いて，次の２点を検討した。第１は，高校部活動における指導者の問題行動（部員に対する暴力）と生徒（部員）の問題行動（部員同士の暴力，いじめ）の発生状況についてである。第２は，問題行動の規定要因についてである。

分析の結果，次の２点が明らかとなった。第１は，部活動における問題行動は運動部を中心に発生していた。第２は，部活動の問題行動は指導者の暴力が起点となって発生していることが推察された。分析結果をもとに，今後の研究課題と展望について考察を行った。

【キーワード】　部活動　問題行動　暴力　いじめ

Ⅰ　はじめに

今日，部活動指導のあり方が学校教育の課題の１つとなっている。平成 24 年度以降に全面実施された中学校の新学習指導要領ならびに高校の新学習指導要領（高校は平成 25 年度新入生から）の総則において，学校教育における部活動の位置づけが明記された。そこでは学校教育における部活動の教育的意義を評価し, 教育課程との関連や運営上の留意点が記されている。このことから部活動に関する実証研究の蓄積がこれまで以上に期待されている。

実際の部活動をみてみると，問題行動の舞台となることがある。特に 2013 年は，部活動指導者による体罰問題が社会問題化した。そのきっかけになったのが, 2012 年冬に発生した高校生の自殺問題である。高校生の自殺は運動部活動における体罰が原因とされたことにより，部活動における体罰に多くの人々が関心を寄せるに至った。このような状況を受けて文部科学省は，体罰問題の解決に向けて対策に乗り出している。2013 年 2 月 5 日，文部科学大臣名において「スポーツ指導における暴力根絶へ向けて～文部科学大臣メッセージ～」というメッセージを文部科学省ホームページに掲載した。その後，平成 25 年 3 月 13 日に「体罰の禁止及び児童生徒理解に基づく指導の徹底について（通知)」という通知が出され，部活動指導の場面においても体罰の禁止が強く要請される事態に至った。

平成 25 年 5 月 31 日受理
＊　はせがわ・ゆうすけ　大分大学教育福祉科学部発達科学教育講座（教育学）

また部活動は指導者だけではなく,生徒の問題行動の舞台として社会問題化することもある。具体的には部員同士の暴力行為やいじめ，喫煙，飲酒などの問題行動である。これら問題行動は高体連や中体連などにおいても処分対象となり,「部活動は問題行動の舞台になる」という認識は広く一般に共有されている。中学高校の学校現場において部活動での問題行動の解決は生徒指導上，重要な教育課題となっている。

このように部活動は問題行動の舞台となるものの，それに関する学術研究の蓄積は少ない。これまでの部活動研究の中心的課題は，教育的効果の解明であった。先行研究では部活動参加が生徒の学校適応に一定の効果があることが明らかとなっている（たとえば白松 1995，白松 1997，角谷 2005，角谷・無藤 2001，岡田 2009）。また高校部活動の経験が参加者の自己評価を高める上で一定の効果があることを実証的分析に基づいて明らかにしている（たとえば長谷川 2005a）。それと比べて，指導者による体罰や，部員による暴力やいじめなど部活動を舞台とした問題行動には学術研究において関心が向けられることは少なかった [1]。新学習指導要領の実施に伴い，適切な部活動運営のあり方や部活動そのものの意義を考えていくためには，部活動の教育的効果といった正の側面だけではなく，指導者による体罰や部員による問題行動のような部活動の負の側面に焦点をあてた実証研究の蓄積が求められるのではないだろうか。

本研究（部活動における問題行動に関する実証的研究）では，中学高校部活動経験者を対象にした調査データ分析を通して,「部活動における問題行動の発生と収束メカニズム」「学校生活全般に及ぼす部活動の問題行動の影響」の２点について実証的に明らかにしていく。そのために部員同士の暴力，いじめなど部活動において部員が引き起こす問題行動に焦点をあてた新規の部活動経験者を対象にした質問紙調査を行うことを計画している。調査分析を通し，新学習指導要領において求められている適切な部活動運営について，学術的実証研究の成果に基づいて具体的な実践のあり方を検討する予定である。

本研究（部活動における問題行動に関する実証的研究）における新規質問紙調査の実施に先立ち，本稿は 2003 年に実施した高校部活動に関する質問紙調査（以下,「2003 年部活動調査」）の再分析を行う。「2003 年部活動調査」は大学生を対象とした回顧調査で，部活動の様子について様々な側面から項目を設定していたことが調査データの特徴として挙げられる。本研究との関連で指摘すると,「2003 年部活動調査」には部活動の問題行動に関する項目が設定されていたことが注目に値する。実際に，長谷川（2005b）が問題行動に関する項目の分析を行った。その結果，いじめや喫煙，飲酒など生徒の問題行動は運動部を中心に発生していることが明らかとなった。ただし長谷川（2005b）は指導者の問題行動は分析対象から除外されていたことや，問題行動の規定要因分析が行われおらず，まだ分析の余地が残されている。

そこで本稿は,「部活動における問題行動の発生と収束メカニズム」を明らかにするひとつの試みとして,「2003 年部活動調査」のデータをもちいて，指導者の問題行動（部員に対する暴力）と生徒（部員）の問題行動（部員同士の暴力，いじめ）の発生状況ならびにそれらの発生を規定する要因に関する試行的分析を行う。分析結果をもとに，今後の研究上の課題と展望について考察を行う。

Ⅱ　分析方法

１　分析の視点

本稿は，次の２点から部活動の問題行動を捉える。第１は，指導者の問題行動である。これ

は生徒（部員）に対する部活動指導者の攻撃を指す。具体的には 2013 年に社会問題化した体罰をはじめ，言葉や態度等による精神的な暴力などが挙げられる。このうち本稿では部員に対する暴力（体罰）を取り上げる。調査票において「以下の部活動に関する項目について，あなたが高校生のとき参加していた部活動はどの程度あてはまりますか？」という質問の１項目である「部の指導者は，部員に対して暴力をふるっていた」（４件法）を分析に用いる。

第２は，生徒（部員）の問題行動である。具体的には，生徒（部員）の喫煙・飲酒，部員同士の暴力，いじめなどが挙げられる。このうち部員の喫煙・飲酒は，長谷川（2005b）などが指摘しているとおり，その原因は部活動以外にあることが推察される。そこで今回は喫煙・飲酒は取り上げず，主に部活動内の人間関係に関連する問題行動を取り上げる。先ほどの指導者の暴力同様,「以下の部活動に関する項目について，あなたが高校生のとき参加していた部活動はどの程度あてはまりますか？」という質問の項目である「部の上級生は，下級生に対して暴力をふるっていた」（上級生から下級生の暴力），「部の上級生は下級生をいじめていた」（上級生から下級生へのいじめ),「部の同級生同士でいじめがあった」(同級生同士のいじめ)である。これら３項目はいずれも４件法で回答を求めている。

指導者ならびに生徒（部員）の問題行動は，部活動の特性や指導者の特性によって規定されていると仮定する。部活動の特性について具体的には，活動種目，部員数，活動日数，参加大会レベルである。指導者特性は指導者が教員であるかどうか，担当教科，性別，年齢を取り上げる。

それらに加えて，問題行動間の関連についても検討する。体罰同様，問題行動間の関連を検討した研究は少ないので，本研究は津後のような視点で分析をすすめる。部活動は指導者と部員によって構成されている。さらに部員集団は学級と異なり異年齢集団であるため，部活動のメンバーは,「指導者」「上級生」「下級生」の三者となる。これら三者の関係は非対称で，一般的に「指導者＞上級生＞下級生」という力関係となっている。そのため問題行動は，指導者を起点として上級生さらには下級生に波及することが推察される。

以上を踏まえ，問題行動の発生状況を記述する。その後，問題行動と部活動特性ならびに指導者特性の関連を分析する。また問題行動間の関連もあわせて分析する。それらの結果を踏まえて，問題行動を従属変数とした重回帰分析を行うことする。

２　調査データの概要

本稿は，2003 年 4 月から 5 月にかけて調査実施された大学生を対象とした高校部活動に関する回顧調査（「2003 年部活動調査」）のデータの再分析を行う。

この調査データの長所は次の 2 点である。第１は，先述の通り，部活動における問題行動に関する項目が設定されていることである。第２は，データのサンプルサイズが比較的大きいことである。表１のとおり，有効回答者数は 1754 名となっている。後述の通り，部活動における問題行動の発生割合は必ずしも高くない。問題行動の規定要因分析を行うためには，ある程度のサンプルサイズが求められるが，今回の調査データは分析に耐えうるだけのものとなっている。

表 1 調査対象者の概要

性別	男	女	合計
	55.1	44.9	100.0（1751）

大学	国立A大	国立B大	私立C大	私立D大	私立E大	私立F大	合計
	24.9	21.4	24.8	9.1	15.1	4.8	100.0（1754）

学年	1年	2年	3年	4年以上	合計
	52.9	27.7	16.2	3.2	100.0（1750）

学部	文科系	理科系	教育	その他	合計
	57.6	20.4	20.0	2.0	100.0（1753）

出身高校の設置者	国立	公立	私立	合計
	3.3	78.8	17.9	100.0（1725）

出身高校の課程	普通科系	商業科系	工業科系	体育科系	総合学科系	その他	合計
	86.5	3.5	3.2	0.2	2.8	3.8	100.0（1753）

高校部活動への参加	参加	不参加	合計
	77.1	22.9	100.0（1752）

高校部活動の活動種目	運動（団体）	運動（個人）	文化（音楽）	文化（その他）	合計
	30.7	39.4	9.3	20.6	100.0（1346）

※ 数値は%，（ ）内は人数。

Ⅲ 分析結果

1 問題行動の発生状況

はじめに部活動における問題行動の発生状況を検討したい。表２は指導者の暴力，部員同士の暴力・いじめに関する単純集計結果を示したものである。まず指導者の問題行動である部員に対する暴力は，「とてもあてはまる」が 2.0%，「ややあてはまる」が 5.9%でこれらの合計「あてはまる（とても+やや）」が 7.9%と 1 割未満であった。生徒（部員）の問題行動についてみてみると，上級生から下級生に対する暴力は「あてはまる（とても+やや）」が 3.7%，上級生から下級生に対するいじめは「あてはまる（とても+やや）」が 3.6%，部の同級生同士のいじめは「あてはまる（とても+やや）」が 6.5%と低い割合を示していた。部活動において指導者，生徒（部員）ともに問題行動は発生しているが，全体的には発生している割合は低いことが分かる。

表 2 指導者の暴力，部員同士の暴力・いじめに関する単純集計結果

		あてはまる（とても+やや）	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない	合計
指導者の問題行動	部の指導者は、部員に対して暴力をふるっていた	*7.9%*	2.0%	5.9%	12.3%	79.8%	100.0%（1349）
生徒（部員）の問題行動	部の上級生は、下級生に対して暴力をふるっていた	*3.7%*	0.9%	2.8%	12.2%	84.1%	100.0%（1351）
	部の上級生は下級生をいじめていた	*3.6%*	0.8%	2.7%	12.1%	84.3%	100.0%（1351）
	部の同級生同士でいじめがあった	*6.5%*	1.8%	4.7%	12.2%	81.3%	100.0%（1349）

※ 数値は%，（ ）内は人数。

しかし活動種目別で，問題行動の発生状況が異なっていた。表３は活動種目別にみた指導者の暴力，部員同士の暴力・いじめの発生状況である。表３は表２で示した４変数について，「とてもあてはまる」「ややあてはまる」を「あてはまる」，「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」と再カテゴリーした。なお表４，５の分析においても同様の手続きを行った。表３は部活動の活動種目別でクロス集計した結果を示しており，有意差

検定はカイ二乗検定の結果である。

指導者の暴力と，上級生から下級生への暴力，同級生同士のいじめが，活動種目によって統計上有意に異なっていた。それら 3 変数についてはいずれも「運動（団体）」がそれ以外の活動種目と比べて,「あてはまる」の割合が高い。特に指導者の暴力は，運動（団体）において「あてはまる」の割合が 17.0%と 2 割近い割合を示していた。また上級生から下級生の暴力や同級生同士のいじめも 1 割弱が「あてはまる」と回答していた。部活動における問題行動は運動部のうち，特に団体競技の部活動において発生する確率が高いことが分かる。

表 3　活動種目別にみた指導者の暴力，部員同士の暴力・いじめ

	指導者の問題行動	生徒(部員)の問題行動		
	部の指導者は、部員に対して暴力をふるっていた	部の上級生は、下級生に対して暴力をふるっていた	部の上級生は下級生をいじめていた	部の同級生同士でいじめがあった
運動(団体)	17.0% ***	7.3% ***	3.6%	10.0% ***
運動(個人)	6.2%	3.6%	4.9%	6.8%
文化(音楽)	0.8%	0.0%	3.2%	4.8%
文化(その他)	1.1%	0.4%	1.1%	1.4%

※　数値は「あてはまる」の割合

※　＊＊＊ p<0.01，＊＊ p<0.01，＊ p<0.05。以下同様。

表 4　部活動特性別にみた指導者の暴力，部員同士の暴力・いじめ

		指導者の問題行動	生徒(部員)の問題行動		
		部の指導者は、部員に対して暴力をふるっていた	部の上級生は、下級生に対して暴力をふるっていた	部の上級生は下級生をいじめていた	部の同級生同士でいじめがあった
部員数	9人以下	4.6%	2.3%	1.1%	1.1% **
	10～19人	8.4%	3.0%	3.9%	8.7%
	20～29人	8.3%	3.4%	4.0%	7.4%
	30～39人	9.9%	6.0%	4.4%	5.5%
	40人以上	7.3%	5.0%	3.4%	5.1%
活動日数	1日	0.0% ***	1.0% **	2.0%	0.0% **
(1週間あたり)	2日	1.6%	1.6%	3.1%	0.0%
	3日	0.0%	0.0%	2.6%	2.6%
	4日	2.0%	0.0%	2.0%	4.0%
	5日	2.9%	1.9%	2.9%	4.3%
	6日	8.0%	3.7%	3.3%	7.7%
	7日	15.5%	6.8%	5.1%	9.7%
参加大会レベル	大会不参加	2.0% ***	2.0%	2.9%	3.9%
	地区大会	4.6%	1.7%	2.9%	5.9%
	県大会	10.6%	4.6%	3.6%	6.8%
	ブロック大会	9.7%	4.0%	6.3%	9.2%
	全国大会	12.1%	6.4%	3.2%	8.9%

※　数値は「あてはまる」の割合

つづいて部活動特性別にみた指導者の暴力，部員同士の暴力・いじめの発生状況についてである。その結果は表 4 である。まず部員数についてであるが，同級生同士のいじめにおいて統計上，有意な差があった。10～19 人，20～29 人において 8 %程度「あてはまる」と回答して

いた。活動日数についてみてみると，指導者の暴力，上級生の暴力，部員同士のいじめにおいて統計上，有意な差があった。いずれの変数も週 6 日ないしは 7 日において暴力やいじめの発生割合が高くなっていた。放課後や休日において多くの時間を練習や試合，大会などに割いている部活動ほど，部活動における問題行動が発生しやすいことが分かる。また参加大会レベルをみてみると，指導者の暴力のみ統計上，有意な差があった。全国大会など実績を残している部活動ほど，指導者の暴力が発生する割合が高かった。

表 5 は指導者特性別にみた指導者の暴力，部員同士の暴力・いじめについてである。指導者の暴力は，すべての項目において統計上，有意な差があった。暴力の発生割合が高まる指導者は，教員であること，担当教科は体育科であること，男性であること，年齢は 30 代であること，が表 5 からわかる。なお生徒（部員）の問題行動は，同級生同士のいじめのみ，指導者の性別で統計上，有意な違いがあった。

表 5　指導者特性別にみた指導者の暴力，部員同士の暴力・いじめ

		指導者の問題行動	生徒(部員)の問題行動		
		部の指導者は、部員に対して暴力をふるっていた	部の上級生は、下級生に対して暴力をふるっていた	部の上級生は下級生をいじめていた	部の同級生同士でいじめがあった
指導者教員	教員	8.8% *	3.9%	3.7%	6.6%
	その他	4.6%	2.7%	3.0%	6.1%
指導者の担当教科	体育	16.7% ***	4.7%	4.3%	7.0%
	その他	5.5%	3.4%	3.4%	6.4%
指導者の性別	男性	9.4% **	4.1%	4.2%	7.6% *
	女性	2.6%	2.1%	1.7%	3.0%
指導者の年代	20代	7.8% **	4.2%	2.4%	6.6%
	30代	11.8%	4.8%	3.9%	7.0%
	40代	7.0%	3.0%	3.5%	7.3%
	50代以上	4.0%	2.8%	4.4%	5.6%

※　数値は「あてはまる」の割合

2　問題行動の規定要因

これまでの分析結果を踏まえつつ，指導者や生徒（部員）の問題行動の発生を規定する要因は何なのか，検討したい。その前に，あらかじめ今回取り上げた問題行動の発生は関連しあっているのか，確認しておく。

表 6　部活動における問題行動の関連

	部の上級生は、下級生に対して暴力をふるっていた	部の上級生は下級生をいじめていた	部の同級生同士でいじめがあった
部の指導者は、部員に対して暴力をふるっていた	0.372 ***	0.240 ***	0.234 ***
部の上級生は、下級生に対して暴力をふるっていた		0.526 ***	0.304 ***
部の上級生は下級生をいじめていた			0.381 ***

※　数値は Pearson の相関係数

表 6 は部活動における問題行動の関連について分析した結果である。表 2 で示した変数につ

いて「とてもあてはまる」を 4 点,「ややあてはまる」を 3 点,「あまりあてはまらない」を 2 点,「まったくあてはまらない」を 1 点と配点して,各変数間の相関係数を算出した。その結果,今回分析で取り上げた問題行動はそれぞれ有意な正の相関があることが確認された。すなわち何かしら問題行動が起こっている部活動は,それ以外の問題行動も発生しやすい状況にあることがこの結果から推察される。

以上の分析結果を踏まえて,部活動における問題行動を従属変数とした重回帰分析を行った。重回帰分析で用いる変数は表 7 で示したとおりである。部活動における問題行動の発生は,部活動の特性や指導者の特性によって規定されていると仮定した。そこで表 3 から表 5 で示した部活動に関する特性ならびに指導者に関する特性を独立変数とした。また基本的な属性変数として性別(具体的には男性ダミー)も独立変数として分析に用いた。

また表 6 の結果から分かるように,部活動における問題行動はそれぞれ関連し合っていた。そこで部活動における問題行動は従属変数とする変数以外は,独立変数として用いることとした。問題行動の連鎖の流れは,指導者から部員,さらに部員同士は上級生から下級生,となっていると仮定し,さらに暴力はいじめのひとつとして行われることがあるため,暴力がいじめの発生に影響を与えると仮定した。

表 7　重回帰分析に用いる変数の概要

問題行動	部の指導者は、部員に対して暴力をふるっていた 部の上級生は、下級生に対して暴力をふるっていた 部の上級生は下級生をいじめていた 部の同級生同士でいじめがあった	とてもあてはまる=4, ややあてはまる=3、あまりあてはまらない=2, まったくあてはまらない=1
回答者の属性	男性ダミー	回答者が男性=1, 女性=0
部活動特性	運動系(団体)ダミー	活動種目が運動(団体)＝1, それ以外の活動種目=0
	運動系(個人)ダミー	活動種目が運動(個人)＝1, それ以外の活動種目=0
	文化系(音楽)ダミー	活動種目が文化(音楽)＝1, それ以外の活動種目=0
	部員数	部員数が9人以下=1, 10～19人=2, 20～29人=3, 30～39人=4, 40人以上=5
	活動日数	一週間あたりの活動日数の実数
	参加大会レベル	参加大会レベルが大会不参加=1, 地区大会=2, 県大会=3, ブロック大会=4, 全国大会=5
指導者特性	指導者教員ダミー	指導者が学校教員＝1, それ以外＝0
	体育教員ダミー	指導者が体育科教員=1, それ以外=0
	指導者男性ダミー	指導者が男性=1, 女性=0
	指導者の年代	指導者の年代が20代以下＝1, 30代=2, 40代=3、50代以上=4

表 8 は重回帰分析の結果である。まず指導者の暴力である。男性ダミーが有意な正の影響を及ぼしていたことから,男性のほうが女性と比べて指導者が暴力をふるう部活動を経験していた。部活動特性に関する変数に着目すると,運動系(団体)ダミー,活動日数,参加大会レベルが有意な正の影響を及ぼしていた。活動種目では,団体競技の運動部であること,また活動日数が多く,参加大会レベルが高い部活動ほど,指導者が暴力をふるっていた。続いて上級生から下級生に対する暴力は,男性ダミーと指導者の暴力が有意な正の影響を及ぼしていた。指導者同様,男性のほうが,上級生が暴力をふるう部活動を経験していた。また指導者の暴力は部員(上級生)の暴力を誘発していることが分かった。

部員同士のいじめについて分析結果を見てみたい。ここでも問題行動に変数が有意な影響を及ぼしており,上級生から下級生に対するいじめは,上級生が下級生に対するいじめが有意な正の影響を及ぼしていた。上級生の暴力は上級生の下級生に対するいじめを誘発していること

が分かった。最後に同級生同士のいじめについてであるが，これは他の問題行動，すなわち，指導者の暴力，上級生から下級生への暴力，上級生から下級生へのいじめ，それぞれが有意な正の影響を及ぼしており，これらは同級生同士のいじめを誘発する要因であることが分かった。

表 8　部活動における指導者，生徒（部員）の問題行動の規定要因（重回帰分析の結果）

	部の指導者は、部員に対して暴力をふるっていた			部の上級生は、下級生に対して暴力をふるっていた			部の上級生は下級生をいじめていた			部の同級生同士でいじめがあった		
	B	β	p	B	β	p	B	β	p	B	β	p
定数	0.801		***	0.684		***	0.460		***	0.372		***
男性ダミー	0.196	0.141	***	0.180	0.167	***	0.041	0.039		−0.054	−0.042	
運動系（団体）ダミー	0.215	0.146	**	0.111	0.097		0.042	0.037		0.108	0.079	
運動系（個人）ダミー	−0.086	−0.061		0.104	0.095		0.112	0.103	*	0.080	0.061	
文化系（音楽）ダミー	−0.134	−0.058		0.018	0.010		0.084	0.048		0.089	0.042	
部員数	−0.018	−0.031		0.023	0.052		0.011	0.025		−0.034	−0.064	*
活動日数	0.047	0.117	**	−0.001	−0.002		−0.007	−0.023		0.025	0.066	
参加大会レベル	0.051	0.088	**	−0.008	−0.018		−0.002	−0.004		0.000	0.000	
指導者教員ダミー	−0.003	−0.001		0.021	0.013		−0.025	−0.016		0.032	0.017	
体育教員ダミー	0.161	0.101	**	−0.045	−0.036		0.002	0.002		−0.060	−0.040	
指導者男性ダミー	0.020	0.011		−0.059	−0.041		0.001	0.001		0.041	0.024	
指導者の年代	−0.006	−0.008		0.010	0.018		0.020	0.036		0.019	0.028	
部の指導者は、部員に対して暴力をふるっていた				0.250	0.324	***	0.034	0.044		0.088	0.095	**
部の上級生は、下級生に対して暴力をふるっていた							0.491	0.498	***	0.122	0.101	**
部の上級生は下級生をいじめていた										0.381	0.313	***
F value		18.204	***		19.729	***		35.025	***		18.861	***
R^2		0.149			0.172			0.285			0.188	
adj. R^2		0.141			0.163			0.277			0.178	

Ⅳ　おわりに　−今後の課題と展望−

本稿は，「2003 年部活動調査」のデータをもちいて，問題行動の発生状況ならびに問題行動の発生規定要因に関する試行的分析を行った。その結果，次の 2 点が明らかとなった。第 1 は，問題行動の発生状況である。部活動における問題行動は，指導者の問題行動（暴力），生徒（部員）の問題行動（上級生から下級生への暴力，上級生から下級生へのいじめ，同級生同士のいじめ）は発生しているが，全体的にはその割合は低く，1 割未満であった。

第 2 は，問題行動の規定要因についてである。指導者の問題行動（暴力）は団体競技の運動部，活動日数ならびに参加大会レベルが高い部活動，また指導者が体育科の教員の場合，部員に対する暴力が発生しやすいことが明らかとなった。また部活動の問題行動は，指導者の問題行動（今回は部員に対する暴力）が起点となっていることが示唆された。すなわち，「指導者の暴力→上級生から下級生への暴力→上級生から下級生へのいじめ→同級生同士のいじめ」という経路で部活動の問題行動が発生していることが明らかとなった。ただし部活動における同級生同士のいじめ発生については直接，指導者の暴力，上級生から下級生への暴力，上級生から下級生へのいじめが影響を与えていた。

今回の分析結果により，これまで等閑視されてきた部活動における問題行動発生メカニズムの一端が明らかとなった。しかし「部活動における問題行動の発生と収束メカニズム」の解明をすすめていく上で，研究手法上の課題が残されている。

第 1 は，問題行動の定義に関わる課題である。今回は暴力といじめを対象にしたが，それらは具体的にどのようなものなのか，回答者によって認識が異なる可能性が高い。暴力については，指導の一環として暴力が行われることがある。その場合，調査で暴力の有無を尋ねられても，暴力はなかったと回答する可能性がある。そのため調査設計段階において，暴力の定義を明確にする必要がある。たとえば暴力は「狭い範囲の極端な身体的攻撃」（湯川 2005, 5 頁）と捉えることができる。さらに調査関心によっては暴力だけではなく，指導者による部員に対する言語の攻撃にも焦点をあてることも重要になるかもしれない。暴力だけではなく，広義の攻撃の有無を質問することも可能である。またいじめについても認識は回答者によって多様である。それゆえ，たとえば調査時にいじめの定義を明確にしておき，何がいじめなのか回答者に想起させた上で回答を求めることが必要となるだろう。その場合，参考になるのが文部科学省によるいじめ定義である。文部科学省のいじめ定義は，いじめ調査において頻繁に用いられている。たとえば学級と部活動におけるいじめ発生の違いを検討する際，文部科学省によるいじめ定義を参照しておくと，適切な比較が可能となる。

第 2 は，理論枠組みに関わる課題である。今回は，経験則にならい規定要因モデルを構築して分析を行った。それゆえ今回の結果は試行的な分析の結果と理解しておくことが妥当である。今後は特定の理論枠組みに準拠して分析をすすめていくことが求められる。とりわけ参考になるのが，教育社会学におけるいじめ研究の理論枠組みである。その代表的なものが森田洋司の「いじめ集団の四層構造論」である。これは周知の通り，いじめは加害者，被害者の二者の関係ではなく，集団によって引き起こされる現象であること，そしていじめ当事者には加害者，被害者に加え，観衆，傍観者の四者が存在することを指摘した理論枠組みである。ただしいじめ集団の四層構造論は主に学級集団を想定しており，部活動を対象にしたものは管見の限りない。

さらにいじめ集団の四層構造論は，部活動における暴力を理解する理論枠組みとして援用可能だろう。すなわち部活動において引き起こされる暴力（攻撃）を加害者，被害者だけではなく，観衆，傍観者の四者の視点から捉える。なお暴力については攻撃に関する研究として，主に心理学を中心的な主導してすすめられてきた。心理学的研究においては攻撃の規定要因として，個人内要因（発達，性差など）や自己愛，自己存在感などが挙げられている（湯川 2005）。こうした心理学の理論枠組みも参照したうえで，これまで等閑視されてきた部活動における問題行動の発生と収束メカニズムの解明を実証的に明らかにすることが要請される。

それ以外に，今回の分析に用いた調査データが 2003 年のものであったことも本稿の課題としてあげなければならない。とりわけ 2013 年に体罰が社会問題化され，その結果，人々の体罰に対する意識やまなざしが変化した可能性がある。以上の課題点を踏まえつつ，部活動における問題行動に関する新規の質問紙調査の実施ならびに分析が期待される。

付記：本研究は JSPS 科研費（若手研究(B)，課題番号 24730743，研究課題名：部活動における問題行動に関する実証的研究，研究代表者：長谷川祐介）の助成を受けたものです。

注

1) 指導者の体罰については，一部の研究者が調査研究を行ってきた（たとえば阿江 2000，高橋・久米田 2008，冨江 2008）。しかしこれらは主に運動部活動が対象でスポーツ活動場面に限定されていることや，本稿で分析を行う生徒との問題行動との関連については検討がなされていないなど課題がある。

参考文献

阿江美恵子, 2000,「運動部指導者の暴力的行動の影響 ： 社会的影響過程の視点から」『体育学研究』第 45 号, pp.89-103.

岡田有司，2009「部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響　－部活動のタイプ・積極性に注目して－」『教育心理学研究』第 57 巻第 4 号，pp.419-431.

白松賢，1995,「生徒文化の分化に与える部活動の影響」『子ども社会研究』創刊号，pp.80-92.

白松賢，1997,「高等学校における部活動の効果に関する研究」『日本教育経営学会紀要』第 39 号，pp.74-89.

角谷詩織，2005,「部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか　－学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから－」『発達心理学研究』第 16 巻第 1 号，pp.26－35.

角谷詩織・無藤隆，2001,「部活動継続者にとっての中学校部活動の意義」『心理学研究』第 72 巻 2 号，pp.76-86.

高橋豪仁・久米田恵, 2008「学校運動部活動における体罰に関する調査研究」『教育実践総合センター研究紀要』第 17 号, pp.161-170.

冨江英俊, 2008, 「中学校・高等学校の運動部活動における体罰」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』第 8 号, pp.221-227.

長谷川祐介, 2004, 「高校部活動からのドロップアウト　－中途退部者の部活動経験と高校生活－」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第 49 巻（CD-ROM 版）, pp. 85-90.

長谷川祐介，2005a,「高校部活動の多様性が持つ影響力の違い　―パーソナリティへの影響に着目して－」『日本特別活動学会紀要』第 13 号，pp.43-52.

長谷川祐介, 2005b, 「指導者の指導態度による部活動経験の違い　―高校部活動を経験した大学生による回顧を基に―」『生徒指導学研究』第 4 号, pp.36-47.

長谷川祐介，2006,「部活動経験者の高校生活　―活動内容の多様性に着目して―」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部（教育人間科学関連領域）第 54 号，pp.71-78.

長谷川祐介, 2011,「大学生活に対する志向性に及ぼす中学高校部活動の影響　―教科外活動の長期的効果に関する分析可能性―」『大分大学教育福祉科学部紀要』第 33 巻第 1 号, pp. 97-108.

湯川進太郎, 2005, 『バイオレンス　攻撃と怒りの臨床社会心理学』北大路書房.

A Trial Analysis of Determinant Factors of Problem Behavior in High School Club Activities

—Focusing on Coaches' Violence, Club Members' Violence and Bullying—

HASEGAWA, Yusuke

Abstract

This paper attempts to elucidate "The mechanism governing the generating and resolution of problem behavior in club activities", using retrospection survey data about high school club activities for university students in 2003, it examines the following two points. The first concerns the situations generating of coaches' problem behavior (violence to members), and members' problem behavior (members' violence, bullying) in high school club activities. The second concerns the determinant factors of problem behavior.

As a result of the analysis, the following two points were found. First, problem behavior in club activities occurred mainly in the athletic clubs. Second, it was surmised that a leader's violence serves as the starting point of problem behavior in club activities. Future research tasks and the outlook were considered based on the results of the analysis.

【Key words】 Club activities, Problem behaviors, Violence, Bullying